

# 「排除の地理学」序説

麻 生 将

## はじめに

古今東西を問わず、人間の営みの場であるコミュニティは、その安定化や秩序づけを目的として、特定の社会集団や施設などの「排除」を伴って成立してきた。たとえば、現代日本社会における在日外国人や新宗教集団など特定の民族集団や社会集団の排撃運動、あるいは葬儀場やごみ焼却場、ラブホテルといった「迷惑施設」と名指しされる建造物の建設反対運動や移転要求運動などが好例である。また、行政によるスラムクリアランスや公共施設からのホームレスの排除、「環境浄化」と呼ばれる「青少年にとって好ましくない」ビラやチラシといった事物の撤去も日本各地で頻発している。

他方、世界に目を向けても、冷戦体制崩壊後に顕在化するようになった民族紛争やそれに伴う民族浄化、外国人労働者や難民に対する排撃運動などが「排除」の事例として挙げられよう。

こうした人間社会において「排除すべき存在」とみなされた社会集団、いいかえれば「異なるもの」に対する「排除」という行為、現象は、さまざまな形で空間や場所の中に刻み込まれてきた。すなわち、イギリスの地理学者シブレイ (Sibley, D.) が「人文的景観は排除の景観として読まれ得る」<sup>1)</sup>と端的に論じたように、我々は眼前に広がる景観の中に「異なるもの」に対する「排除の物語」を見出し得るといってよかろう。本稿は、空間の中に刻まれ、日常的景観に織り込まれた「異なるもの」をめぐる「排除の物語」が地理学的観点からどのように読み解かれ得るのかについて、理論的考察を試みるものである。

## 第1章 排除と地理学

ここで、「異なるもの」への「排除」という行為、現象の性格について少し触れておきたい。人間は自分(達)の生命や財産、精神の安定を志向、希求する。これが「異なるもの」を「排除」する根本的な動機となり、人間は何らかの形で境界線を設定し、特定の個人や集団を境界線の外に追い出そうとする。

このような「異なるもの」の「排除」という行為、現象は、「いつの時代にも、またどんなところにもある(中略)避けがたい人間社会の事実」であり、「否応なく人間社会が抱え込んでしまった負のシステム」<sup>2)</sup>に他ならない。それは、人間がコミュニティを構成し、維持する上で「排除」という行為、現象がやむを得ない、もしくは必要不可欠な側面を有していることを表している。また、「排除」とは「社会と文化のあらゆる領域に現れる」<sup>3)</sup>、普遍的な現象でもある。そして、「排除」の対象となる個人、集団の「差異はそのつどあらたに発見され」という赤坂憲雄の説<sup>4)</sup>も忘れては

なるまい。すなわち、「異なるもの」は初めから異質かつ排除の対象であったわけではなく、何らかの状況や条件の下で主流社会から「異なるもの」との眼差しを向けられることで、初めて排除の対象となる。そしてその眼差しは、排除される側に関する表象や言説、記憶に由来する場合が多い。それゆえ、「排除」が起こる際には、表象や言説あるいは記憶が「異なるもの」の「発見」、あるいは「創造」を後押しする重要なファクターになると考えられる。

以上のことをまとめると、「排除」とは普遍的かつ不変的に人間社会の中に存在してきた現象としての側面を有している。実際、様々な立場の人々によって、何らかの状況や条件の下での特定の社会集団に対する「排除」が世界各地で頻発してきたという歴史的事実が物語っている。結局のところ、人間の営みの空間的結果に他ならない人文的景観には、その安定性、均質性を維持すべく、「異なるもの」を絶えず「あらたに発見」し、排除し続ける機能が内包されている<sup>5)</sup>、と言えよう。

しかしながら、これほど普遍的な現象であるはずの「排除」は、他方で認識しづらいものであると考えられてきた。たとえば、今村仁司によると、「排除」の効果の潜在性は「予測することはできるが、効果の現前または現実存在の事実確認は一般に大変困難」<sup>6)</sup> (傍点筆者) であるという。また、前出の地理学者シブレイも、「(排除という行為、現象は) 注視されることが少なく、しかも社会においては、排除が行われる際の方法が隠されている」<sup>7)</sup> と指摘する。このように、「排除」という行為、現象は、日常生活をはじめとする人間の全ての営みの中において、明確に読み取ることが一見すると困難であるかのように論じられてきた。

これらの指摘は、文字通り「異なるもの」への「排除」が巧妙に隠されながら実践されてきたということを示している。それと同時に、「排除」という行為、現象があまりにも自明であるが故に、行為それ自体を排除と認識することが人間一少なくとも排除する側一にとって困難であったとも考えられる。あるいは、「異なるもの」の「排除」そのものが目的のではなく、「排除」によって達成される別の目的の方が強調されることが多いのかもしれない。その際、別の目的達成のプロセスを正当化する物語が生み出され、継承され続ける限り、「排除」の実践そのものが顕現することはなく、むしろ隠される傾向が一層明瞭になるだろう。そうすると、特定の社会集団が排除された後に「排除」の痕跡、証拠を第三者が見出すことは一見すると困難かもしれない。そもそも、「排除」という行為そのものが当事者にしか認識され得ないという側面をはらんでいるからにほかならない。

しかし、シブレイが「人文的景観は排除の景観として読まれ得るのである」と述べているように、「排除」という現象は可視化される空間的事象としてこの地表面に立ち現れ得るものである。そして、我々は地理的想像力を介して、景観やそれを構成する事物の中に刻み込まれた「排除」と、その背景にある表象、記憶、物語とを読み取っていくことは決して不可能ではない。一見、理性によって体系づけられ、秩序を与えられた人文的景観の中にこそ、「異なるもの」の「排除」という暴力を幻視できる場合もあるからだ<sup>8)</sup>。

## 第2章 空間的事象としての排除

### 第1節 先行研究に見る排除

地理学は「景観の学」を自称してきたように、当該地域の景観の読み解きを通して、人間と環境との関わり、人間活動の政治経済的、社会文化的なプロセスやそれらの空間的結果を解釈し、記述

することに関心を払ってきた。すなわち、地表面に生じる空間的諸現象や景観を分析し、記述する学問である。「排除」という空間的実践によって特定の集団や建物が取り除かれ、空間的な変質を引き起こした事象もまた、当然のことながら、地理学の研究対象となろう。こうした「異なるもの」に対する「排除」の実践を対象とした研究事例は、都市地理学や社会地理学、そして文化地理学の分野で数多く見受けられる。

たとえば、近代日本における在日朝鮮人集住地区<sup>9)</sup> やスラム街<sup>10)</sup>、日雇い労働者の居住地域<sup>11)</sup>、あるいは中国人労働者の集住地区<sup>12)</sup> をめぐる排除の実践に関する研究が挙げられよう。すなわち、都市部における特定のマイノリティならびに彼らの居住地域の排除を正当化する論理や言説、表象がマスメディアによって形作られるとともに、最終的には行政による政治的、政策的な意図に基づく排除の実践と「空間の政治」のプロセスを考察した研究である。

また、筆者は昭和戦前期の地方都市における美濃ミッションというキリスト教集団<sup>13)</sup> の排除を扱った論考の中で、地域社会を構成する主要なアクターがさまざまな形で排除に関わっていた実態を解明した。それとともに、地域メディアが排除に関係する多様な言説のせめぎあう舞台として重要な役割を担っていたことも指摘した。

さらには、行政による空間管理の観点から特定の個人や集団を一定の空間に留めることによって、彼らを一般社会から排除する実践を扱った研究事例<sup>14)</sup> もある。たとえば、寄藤晶子は現代日本において地方自治体による競艇場の管理が、利用者（多くは失業者や日雇い労働者などの社会的弱者）を「一般社会」から「合法的に」隔離するための空間、すなわち「ギャンブル空間」を形成している実態を明らかにしている。なお、このほかにも、ジェンダーの観点から特定の性的少数者を疎外する空間に関する論考<sup>15)</sup> も見られる。

これらの先行研究では、近現代日本社会における「異なるもの」の「排除」をめぐる政治、社会、経済地理学的解釈が試みられているとともに、「排除の実践」と場所との関係やそこに介在する多様なアクター間の政治力学、言説がどのように「排除の実践」に結びついていったのかが議論されている。しかしながら、「異なるもの」の「排除」という行為、現象そのものについて正面から論じているものはほとんどなく、とりわけその複雑さ、多様さに関して必ずしも十分に議論されてはいない。しかも、それらの多くは、「異なるもの」をめぐる言説や表象と結び付けられた場所、あるいは建物が最終的に排除、抹消されるという前提での議論に終始している。すなわち、当該社会において「異なるもの」として排除された社会集団が深く関わってきた場所や施設の物理的実践の視点、いかにすれば「排除の景観」の視点に対する関心が払われていないのである。しかし、あらためて述べるまでもなく、排除後の場所をめぐる実践は、実に多様なものである。そこで、以下に代表的な事例をいくつか挙げておこう。

たとえば、中世ヨーロッパにおけるユダヤ人迫害の中で起こった、シナゴグ（ユダヤ教の礼拝堂）のキリスト教教会への転用<sup>16)</sup> の事例である。これについて藏持不三也は、キリスト教徒たちは、ユダヤ人から没収した礼拝堂などの不動産を教会に寄進することによって、結果的にユダヤ人への一連の迫害と排除を正当化することになったと指摘した。また、現代イタリアでのマフィア追放運動とマフィア不動産の福利厚生施設としての再利用<sup>17)</sup> に関して、住民の代表者は「日陰のものが意味のある施設に変わるのには市民への強いメッセージ」であると述べている。ここから、マフィアという排除されるべき「異なるもの」が所有していた不動産を住民にとって有益な施設に転用することによって、住民がマフィア追放の理念、あるいは正当性を一層確固たるものにする様子が伺える。

さらに、筆者は昭和戦前期の奄美大島におけるカトリックの排撃運動の中で、カトリックを排除した行政側によってカトリックの礼拝堂が町役場や公民館などに転用される事例を扱ったが、その中で、行政側がカトリックの排除を正当化する新たな物語を、転用した礼拝堂に付与することで、礼拝堂が「排除の景観」としての機能を果たしていた実態を明らかにした<sup>18)</sup>。このように、排除すべき集団と関係の深い建物を転用する目的は、それによって「排除」を正当化することにあった。こうした企図は、転用された建物の中に正当なる「排除の物語」を読み込み、集合的な記憶として地域社会—排除実践の主体—が共有することによって、その目的が達成されるのである。

ちなみに、歴史の集合的記憶と施設の転用に関わる事例ではあるが、宗主国の手で築かれた植民地支配の象徴とも言うべき建築物が独立国側に利する形で転用あるいは再利用されてきた例も数多く見られる。たとえば、英領マラヤ時代にイギリスによって建設されたクアラルンプール中央駅舎やシンガポールの最高裁判所の建物は、現在では観光資源としても活用されており、他方、日本による朝鮮半島統治時代の旧京城府庁舎は、現在ソウル市庁舎として利用されている<sup>19)</sup>。これらの事例については、過去の植民地支配の過酷な歴史を集合的記憶として国民の間での共有を目的とする場合もあるし、単に独立直後の社会的インフラ整備の負担軽減の目的もあるだろう。以上のことをふまえると、フット (Foote, E, K.) の言う「聖別」—一人々が永続的な記憶を望む、積極的で肯定的な出来事を記念碑などの形で顕現させる行為、現象—<sup>20)</sup> がこうした事例にも見出されるであろう。だが、これまで述べてきたような、排除と転用とが共存する事例については、従来の地理学ではあまり注目されてこなかったのである。

## 第2節 「排除」をめぐる2つの問いかけ—小口千明とシブレイの論考から—

以上述べてきたように、「異なるもの」の「排除」の結果、そこに表出する「排除の景観」の中に多様かつ複雑な性質が見出される事例は少なくはない。だが、先述したように、これまでの地理学の先行研究ではこうした観点からのアプローチは不十分であったか、もしくは限定的な言及にとどまっている。その中で、小口千明とシブレイという二人の地理学者による論考は注目に値する。いずれも、「排除」という行為、現象を、多様な事例を通じて正面から論じたものだからである。

まず、小口の一連の研究<sup>21)</sup>について考えてみたい。小口は、刑務所など一般に忌避されがちな施設やそれが立地する場所に対する、周囲の人々が抱く認識—「好まれない空間」の存在に対して見出された何らかの、独特の価値観—の存在を指摘する。そして、「好まれない空間」に対しては、住民運動の例からみて、人々は明確な強い反応を示す傾向が認められ」るため、「好まれない空間」の方がより相対的に「人々の主観的判断を把握しやすい性質をもつと考えられる」のだという。

たしかに、「好まれない空間」をめぐるのは、「異なるもの」に対する忌避、恐怖といった感情が一層強く生起し、そこから排除の実践に結びつく可能性が高いことは言うまでもなく、この点は後述のシブレイの考え方も合致する。ただし、小口の関心は、特定の場所や建物が何らかの言説、表象、価値観によって「好まれる」か「好まれない」か、と認識される点に主眼が置かれており、こうした認識や表象、あるいは言説と物理的な空間への何らかの働きかけ、すなわち空間的实践との関係にまで踏み込んだ議論が必ずしも十分になされているわけではない。だが、「異なるもの」やその場所に関する多様な言説、表象が時代状況や社会的条件などによって変化し、物理的空間に対する意味合いもまた様々である点に着目し、場所をめぐる「排除」に関わる実践や言説の多様さを浮き彫りにしている点で、注目すべき研究であろう。

次に、シブレイの研究<sup>22)</sup>について見てみたい。シブレイはその著書“*Geographies of exclusion*”の中で、人間の心理状態によって、特定の「異なるもの」をめぐる多様な言説が生じる過程や、そうした言説と複雑に関連しあう場所や空間の構成について、近世の地誌書籍や風景画、菓子のパッケージや子どもが公園で遊ぶ写真など、多様な素材を用いて考察を行っている。たとえば、産業革命後のイギリスで、ロマに対する多様な言説の含意について、風景画や菓子のパッケージをテキストとして読み解いている。そこにはロマをめぐる「市民ではない」、「市民社会の周縁に生きる人々」、「自然の一部なのだから、市民にはなれない」といった「排除」を肯定する言説とともに、「素朴」、「自然の一部」、「郷愁的」、「神秘的」などの憧憬の言説も同時に生産されていたことを示した。また、20世紀初頭のパリの廃品回収業者がブルジョアジーによって、「汚れた物を取り扱う人々」等の否定的な眼差しを向けられる一方で、「自由な立場で生きていることへの憧れ」、あるいは「魅惑的」と表象されていたことも指摘している。こうした相反する多様な言説や表象の前提として、ロマや廃品回収業者が主流社会によって異質な「他者」、すなわち「異なるもの」と認識されていたことが挙げられよう。

景観や空間の中に刻み込まれた「排除」に対して、「好まれない空間」あるいは「排除の景観」という概念をもって迫る小口やシブレイのこうしたアプローチは、地理学において「排除」を正面から取り扱う上で有効かつ重要であると考えられる。こうした「異なるもの」の排除という空間的事象を多様なアプローチで読み解こうとする地理学は、シブレイの著書のタイトルのように「排除の地理学」と呼ぶに相応しい。ただし、小口とシブレイに共通して言えるのは、排除とそれに関わる言説や表象をある一時点で切り取られた言説と空間との関係において論じている感が強いことである。様々なテキスト、とりわけ物理的な空間とそれに関する表象、言説、記憶とが一度きりの相互関係を持つのではなく、それらの間での往還関係の連続の中においてこそ、景観ないしは空間の中に「排除」という行為、現象をより動的に透視することができるのである。なぜならば、物理的空間とは、不変のものではなく、絶えず様々な表象や言説、記憶や物語がそこに見出されると同時に、物理的、空間的实践によって変化を余儀なくされているからである。そして、変化した物理的空間が更に新たな言説や表象を生み出していくこととなり、「排除」を正当化する物語や記憶が創られ、物理的空間の中に読み込まれるといった、一連の絶えざる往還関係が存在するのである。

それに加えて、小口の「好まれない空間」論やシブレイの「排除の地理学」論に関しては、地理学的な理論化への枠組みが不十分であると思われる。そこで次章では、「排除の地理学」論の理論的構築に資すると考えられる重要な概念をとり挙げ、その有用性と妥当性を検討していきたい。

### 第3章 「排除の地理学」の2つの基礎的理論

#### 第1節 社会 - 空間弁証法

はじめに、社会 - 空間弁証法について考える。この概念を提唱した都市地理学者のソジャ<sup>23)</sup> (Soja, E.) は、従来の地理学のディシプリン内部において、「物質的な空間」と「隠喩的な空間」の二元論的な硬直したセグメントが存在し、地理学界そして地理学者を支配してきたと指摘する。すなわち、ソジャは物質的で物理的な現実の「第一空間」と、非物質的で心的な想像上の「第二空間」という、従来の二元論的な空間の解釈を弁証法的に乗り越えるべく、「現実 - かつ - 想像上」の、すなわち「物

質的 - かつ - 隠喩的」な「第三空間」(The third space) の可能性に論及したのである。ソジャは、現実の空間をめぐる物理的実践と、そうした空間に関する表象や言説、記憶や物語などの社会的な諸要素との弁証法的往還を通じて、そこに見出される新たな空間的思考をもってあらゆる人文的景観を解釈し直そうとしたのであるが、彼はこの方法を「社会 - 空間弁証法」と呼ぶ。ソジャは「幻想と引喩で満たされた」空間へのアプローチに基づく社会 - 空間弁証法を提唱するにあたって、「人種・階級・ジェンダーその他の諸問題に対する実践的な解決策の探究」を目指し、ルフェーブ (Lefebvre, H.) やバーバ (Bhabha, H.)、フックス (Hooks, B.) そしてフコー (Foucault, M.) などによる多様な議論、とりわけポストモダンに関する諸議論を挙げ、「第三空間」の可能性について論じている。

むしろ、欧米の地理学あるいは社会学、人類学などの分野においては、社会 - 空間弁証法という形で明確に概念化されるまでもなく、空間をめぐる物理的実践と非物質的、社会的要素との弁証法的往還に関わる視座は既に存在していた。とくに、人文地理学においては人文的景観をめぐる文化的、社会的諸現象とその空間的結果の解釈に主たる関心が払われており、ソジャがことさらに強調するまでもなく、人文的景観に対する弁証法的なアプローチが経験的に行われてきたと考えられる。ただし、ソジャが指摘するように、従来の地理学においては物理的な空間か、もしくは表象された空間かのいずれか一方に主眼が置かれてきたために、「現実」と「想像」との絶えざる弁証法的往還の中で人文的景観が形成され、それが絶えず変化を繰り返す過程に関心が払われてこなかったのもまた事実である。そして、他の先行研究を含め、この空間概念を明確に理論化、昇華させて、直接的に実証にまで適用した研究事例も管見の限り多くは認められない<sup>24)</sup>。この点は今後の地理学、とりわけ人文地理学全般に共通する課題の一つとなろう。

さて、この社会 - 空間弁証法と「排除」をめぐる議論に引きつけて考えてみるならば、「排除」という空間的事象の背景には、絶えず「異なるもの」の「あらたな発見」が見られ、そして、「排除の景観」もまた、その意味づけが目まぐるしく変化し続けているのである。換言すれば、排除にまつわる物理的空間ないし景観と、排除の言説、表象、記憶との間には、絶えざる往還関係が横たわっているのである。まさしく、「異なるもの」の排除とは、空間をめぐる物理的実践と社会的諸事象との弁証法的往還の視座を無視しては捉えることが出来ない現象であり、地理学が排除という空間的事象を正面から取り扱うには、排除に関わるこうした往還関係に留意せねばなるまい。こうして、ソジャの社会 - 空間弁証法は、「排除の地理学」の中心的な概念と位置づけることができ、こうした絶えざる弁証法的往還の中で見出される排除を、「社会 - 空間的排除」と呼んでも差し支えないであろう。

## 第2節 記憶の場

前節では、物理的空間と表象、言説、記憶とが絶えざる弁証法的往還の中で相互作用を及ぼしあう社会 - 空間弁証法について、その基本的な考え方を紹介した。この弁証法的往還で説明される空間的事象のうち、「異なるもの」をめぐる排除の実践においては、主として地域社会のコンセンサスとその正当性が必要不可欠になってくる。メンミ (Memmi, A.) によると、差別する側は被差別の「犠牲者に対し罪悪感を感じて」おり、差別する側の罪を「被差別主義者にかぶせることを是認」するからだという<sup>25)</sup>。すると、そこには正当なる排除の物語が構築されることになり、排除の実践者の間で「異なるもの」とその「排除」に関わる集合的記憶が創造され、「排除」の実践を正当化する物語が語り継がれなくてはならない。そして、その「排除の物語」は、「排除」を実践する側によ

て特定の空間や建造物もしくは景観に意図的に刻み込まれ、絶えず再生産され続ける場合が多い。

この集合的記憶と特定の場所、施設、記念碑などとの結びつきに関連して、歴史学ではノラ (Nora, P.) が「記憶の場」の概念<sup>26)</sup>を提唱している。この「場」とは、ノラによると集合的記憶が根付いているモニュメント、行事、場所などを指すという。また、「記憶の場」の歴史学の特徴として、「ある事件がなぜ起こったか…よりもその記憶の行方、『読み替え (アプロプリアション)』のほうに注目する歴史学」であり、「原因より結果に多くの関心を寄せ」、「事件それ自体よりも、時を経て事件のイメージがどう作られていくか」(傍点筆者)に焦点を置いている点が挙げられよう。つまり、「記憶の場」とは、「『過去の想起』としての記憶ではなく『現在のなかにある過去』の『総体的な構造としての記憶』」に関心を寄せる歴史学の概念なのである。

また、ノラは「記憶」を「記録」と対比させたうえで、「あらゆる利用や操作を受けやすい」ものであると述べ、「想起と忘却を繰り返」して「たえず変化」するものであると説明する。しかも、その変化は「現在の想像力に基づいて特定の出来事を選択し呼び起こす行為、表象を媒介とした再構成の行為」<sup>27)</sup>であり、ノラはこれを「再記憶化」と呼ぶ。そして、絶えざる「再記憶化」は、主に政治権力によって引き起こされ、当該国家または地域における集合的記憶が形成されていくのである。このように集合的記憶が絶えず「現在の」文脈でそのつど構成し直される様子は、活字資料や口承伝承のみならず、彫像や記念碑、建造物、街路名、祝祭などの現存するあらゆる事物、事象を通して「記憶の場」として分析、考察されることになる。

以上のことから、「記憶の場」とは、現在そこにある様々な事物をテキストとして、常に変化を続ける集合的記憶を読み解く歴史学の概念であることが指摘できよう。この概念を通して、地域や場所、景観の中に記憶のせめぎあいと、最終的にそこに形成される集合的記憶が見出されることから、地理学においても「記憶の場」を援用した研究が試みられてきている。たとえば災害復興過程における民間信仰をめぐる場所の記憶の変化を扱った論考や、歴史的遺産ならびに記念碑などのモニュメントが存在する場所の管理、意味づけの変化を扱った研究事例などである<sup>28)</sup>。

では、「記憶の場」と「排除」とはどのように関係するのだろうか。たとえば仮に、排除の後に転用された建物を一種の記念碑として解釈するならば、それは排除をめぐる「記憶の場」に他ならない。そして、その「記憶の場」を通じて、「異なるもの」の「排除」に関わる集合的記憶が絶えず解釈し直されながら、「排除」を正当化する物語が生み出される過程を見出すことが可能になる。それに加えて、集合的記憶の絶えざる再構成を通して排除が正当化されるプロセスは、先に述べた中世ヨーロッパや昭和戦前期の奄美大島、現代イタリアの建物転用の事例にも見られるものである。以上のことから、「排除」という空間的事象を読み解く際に、「記憶の場」の概念を用いたアプローチもまた有効かつ必須であるといえよう。

さらに、もう一步踏み込んで議論するならば、表象や言説と、集合的記憶との架け橋としてメディアが果たす役割を指摘することができる。筆者は昭和戦前期の岐阜県と奄美大島における宗教集団の排除のプロセスとその要因について検討したが、その中で地元新聞やラジオなどのメディアが排除の言説や記憶の生成に大きく関わっていたことを明らかにした<sup>29)</sup>。そもそも個々人の表象や言説、イメージや記憶は飽くまでも個人に還元されるものであり、共通性ないし一般性を持つとは限らず、噂程度のレベルで完結することさえある。それがメディアによる報道を通じて、本来個人のレベルに還元されるはずの記憶や噂が確定的な「事実」へと変化していく<sup>30)</sup>。そして、この「事実」が多数の目に触れることによって新たな共通の記憶、すなわち集合的記憶が生み出されていくと考え

られるのである。

従来の集合的記憶に関する議論においては、儀式やモニュメントなどが集合的記憶の（再）生産の機能を有する「記憶の場」として捉えられてきた。しかし、近代以降はメディアによる「異なるもの」をめぐるセンセーショナルな報道が多く見られ、報道を通じて「排除」に関する多様な言説が生み出されるとともに、「排除」を正当化する物語が形作られていった例は枚挙に暇が無い。そしてメディアそれ自身が、集合的記憶の再生産を続ける「記憶の場」として機能を果たしてきたことは改めて述べるまでもないであろう。

### おわりに

本稿では、地域社会における「異なるもの」の「排除」をめぐる地理学的研究、すなわち「排除の地理学」の可能性を検証するとともに、「排除の地理学」を成り立たせる、あるいはそれをめぐって重要と考えられるソジャの「社会 - 空間弁証法」およびノラによる「記憶の場」の概念について検討を試みてきた。「異なるもの」の「排除」は、先行研究でも指摘されているように、普遍的でありながら明確には認識されづらい行為、現象であるとみなされてきた。しかしながら、本研究において注目したソジャとノラがそれぞれ提起した概念によって、空間の中に刻まれた「排除」をより明確に読み解く可能性を提示することができた。

一つはソジャの社会 - 空間弁証法である。社会 - 空間弁証法によって、排除という空間的事象と、その背後にある多様な言説、表象、記憶との相互の動的な関係を見出し、空間の中に刻み込まれていながらも、明らかにしづらいつとされてきた排除を浮き彫りにすることが可能であると考えられる。つまり、「排除」とは空間をめぐる物理的実践と社会的諸事象との弁証法的往還の視座を無視しては捉えることが出来ない現象であり、したがって社会 - 空間弁証法は「排除の地理学」にとって必要不可欠な概念なのである。

もう一つはノラの「記憶の場」である。これはもともと、ノラを中心とするアナル学派によって生み出された歴史学の概念であったが、記念物や場所をめぐる集合的記憶の絶えざる再構成が空間、そして景観の形成に重要な役割を果たす点で、「排除の地理学」においても非常に有益な理論であると考えられる。なぜならば、「異なるもの」に関わる集合的記憶もまたそのつど再解釈され、「排除」を正当化する物語が物理的空間に刻まれるからであるが、この点は社会 - 空間弁証法とも関連していると考えられる。

ただし、残された課題もある。そもそも、「異なるもの」への「排除」の内容や類型は多岐にわたっていると考えられ、物理的空間の消滅や建物の転用などといった単純な類型化が困難であることはいままでのない。たとえば、中世日本の非農業民に関する網野の一連の研究<sup>31)</sup>からも分かるように、排除された人々が辿った姿や排除する側とされる側の間で政治力学も決して一様ではない。ましてや、そこに形成される「排除の景観」がその後たどった軌跡も様々である。今後の課題は、「排除の景観」論そして「排除の地理学」を精緻化し、より確固たるものにすべく、古今東西のさらなる事例の発掘とその理論的探究にある。



## 注

- 1) Sibley, D., *Geographies of exclusion: society and difference in the West*. Routledge, 2003.
- 2) 中村生雄「まえがき」(赤坂憲雄・中村生雄『排除の時空を超えて』岩波書店、2003)、5頁。
- 3) 今村仁司『排除の構造』筑摩書房、1992、35頁。
- 4) 赤坂憲雄『排除の現象学』洋泉社、1987、75頁。
- 5) 前掲4)、54頁。
- 6) 前掲3)。
- 7) 前掲1)、p. ix。
- 8) 前掲3)、101-103頁。
- 9) 福本拓「1920年代から1950年代初頭の大阪市における在日朝鮮人集住地の変遷」人文地理 56 (2)、2004、42-57頁。
- 10) たとえば、①加藤政洋「大阪最初のスラムクリアランスとその帰結—「木賃宿の長屋」地区の形成をめぐって」立命館大学人文科学研究所紀要 83、2004、1-22頁、②加藤政洋『大阪のスラムと盛り場：近代都市と場所の系譜学』創元社、2002、③本岡拓哉「戦後神戸市における不法占拠バラック街の消滅過程とその背景」人文地理 59 (2)、2007、130-150頁。
- 11) 原口剛「『寄せ場』の生産過程における場所の構築と制度的実践—大阪・『釜ヶ崎』を事例として—」人文地理 55 (2)、2003、121-143頁。
- 12) 阿部康久「昭和初期の東京とその周辺地域における中国人労働者の排除と集住地区の衰退」地理学評論 73 (9)、2000、694-714頁。
- 13) 麻生将「宗教集団をめぐる社会 - 空間的排除のプロセス—1930年代の「美濃ミッション事件」を事例として」歴史地理学 50 (3)、2008、15-31頁。
- 14) たとえば①山口晋「「ヘブンアーティスト事業」にみるアーティストの実践と東京都の管理」人文地理 60 (4)、2008、279-300頁、②寄藤晶子「愛知県常滑市における「ギャンブル空間」の形成」人文地理 57 (2)、2005、131-152頁、など。
- 15) 村田陽平『空間の男性学：ジェンダー地理学の再構築』京都大学学術出版会、2009。
- 16) 藏持不三也『異貌の中世—ヨーロッパの聖と俗—』弘文堂、1986。
- 17) 『朝日新聞』2009年1月10日「マフィア財産地域還元」。
- 18) 麻生将「1930年代奄美大島におけるカトリックをめぐる排撃と「排除の景観」の形成」人文地理 63 (1)、2011、22-41頁。
- 19) ①町村敬志、西澤晃彦『都市の社会学』有斐閣、2007、②橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、2004。
- 20) ケネス・E・フット著、和田光弘他訳『記念碑の語るアメリカ』名古屋大学出版会、2002。
- 21) 小口千明『日本人の相対的環境観—「好まれない空間」の歴史地理学』古今書院、2002。
- 22) 前掲1)。
- 23) エドワード・W・ソジャ著、加藤政洋訳『第三空間—ポストモダンの空間論的展開』青土社、2005。
- 24) たとえば①前掲13)、②前掲14) ②、③前掲18)、などの論考が存在するものの、理論の精緻化と事例研究への適用については、まだ議論の余地があると考えられる。
- 25) アルベール・メンミ著、白井成雄、菊池昌実訳『差別の構造—性・人種・身分・階級』合同出版、1971。
- 26) ノラ、P. 編、谷川稔監訳『記憶の場—フランス国民意識の文化=社会史 第1巻 対立』岩波書店、2002。
- 27) 阿部安成ほか編『記憶のかたち：コメモレイションの文化史』柏書房、1999、7頁。
- 28) 近年、地理学においても記憶と場(所)の関係を扱った研究事例が多い。たとえば、①相澤亮太郎「阪神淡路大震災被災地域における地蔵祭祀—場所の構築と記憶—」人文地理 57 (4)、2005、62-75頁、②大平晃久「対立する記憶と場所—小港町・香川県汐木をめぐる歴史意識—」歴史地理学 46 (5)、2004、25-39頁、③米家泰作「歴史と場所—過去認識の歴史地理学—」史林 88 (1)、2005、126-158頁、④柴田剛「「場所」／「記憶」／「物語」」空間・社会・地理思想 12、2008、51-57頁、などが挙げられる。また、前掲19)は、記念碑やモニュメントなどに込められた記憶や表象を扱った代表的な研究事例である。

29) ①前掲 13)、②前掲 18)。

30) 駒橋恵子「地域社会と口コミ、風評の仕組み」(田村紀雄編『地域メディアを学ぶ人のために』世界思想社、2003 所収)、191-211 頁。

31) たとえば、網野善彦『無縁・公界・楽』平凡社、1996、など。

(本学大学院博士後期課程)